広島大学教育学部紀要　第1部（心理学）第41号　1992

日常記憶研究の生態学的妥当性

森　敏昭
（1992年9月10日受理）

Ecological validity of everyday memory research

Toshiaki Mori

Comments on the debate between researchers who advocate laboratory-based and naturalistic study of memory, as to the relative merits and demerits of the two approaches, were presented. To evaluate the validity of Banaji and Crowder's (1989) claim that the naturalistic study of memory has been unscientific, unprofitable, and favoring the use of ecologically valid methods at the expence of generalization of results, four significant lines of everyday memory studies were reviewed and discussed: studies of autobiographical memory, studies of eyewitness testimony, studies of flashbulb memory, and studies of action slip. By evaluating the value of everyday memory research as compared with that of laboratory-based memory research, it was concluded that attempts to further progress in the study of human memory should try to integrate rather than alienate different approaches to human memory.

Key words : everyday memory, ecological validity, autobiographical memory, eyewitness testimony, flashbulb memory, action slip.

1．はじめに

“もしXが人間行動の重要で興味深い特性であるならば，それは心理学者が研究していない特性である。”このNeisser（1978）の言葉は，記憶の実験室研究に対する痛烈な批判であると同時に，記憶研究は「生態学的妥当性」を追求すべきであると説く檄であったとも言えよう。そしてこの檄は，あたかも燎原に放たれた火のごとくに燃え広がり，生態学的妥当性を基本コンセプトとする記憶研究の数は，その後の十数年の間に急激に増加した。具体的には，厳密な条件統制のもとでなされる実験室研究よりも，日常場面においていかに記憶が機能しているかを明らかにしようとする「日常記憶」の研究が盛んになり，Neisser（1982）やCohen（1989）のようなテキストの編集も可能になったほどである。しかしながら，このような急激なパラダイムの変革は，必ずしも全ての記憶研究者に快く受け入れられたわけではないようである。American Psychologist誌に掲載された“日常記憶の破産”と題するBanaji & Crowder（1989）の論評が端的にそれを示しているし，この論評が引き金になってその後に生じた「実験室派」と「日常記憶派」のいささか感情的な論争によっても，そのあたりのぎくしゃくした状況を窺い知ることができる。もとより論争は学問にはつきものであり，それが正常に機能するならば，研究を活性化し，新たな概念や理論を生み出す原動力ともなる。しかし，筆者の見るところ，上記の論争の場合には，その機能がうまく働いていないようである。おそらくその原因は，そもそもこの論争にとっての鍵概念である「生態学的妥当性」についての吟味が十分になされていないことにあるのではないかと筆者は考えている。そこで本稿では，まず記憶研究における生態学的妥当性の意味を吟味し，次に生態学的妥当性を旗印にして展開している最近の代表的な「日常記憶」の研究を取り上げ，それらが本当にNeisser（1978）の言うような記憶の“重要で興味深い特性”を研究していると言えるのか否かという点について論考する。そして最後に，これからの記憶研究のありかたについて若干の私見を提示することにしよう。

2．記憶研究における生態学的妥当性とは

記憶研究の生態学的妥当性とは，いったい何を意味しているのであろうか。文章の記憶実験は無意味綴の記憶実験よりも生態学的妥当性が高いと言えるのであろうか。人物の顔写真の再認過程を明らかにすることは，ランダム図形の再認過程を明らかにすることよりも生態学的妥当性が高いと言えるのであろうか。自伝的記憶の研究や目撃者の証言の信憑性を調べる研究は，はたして単語のリストの自由再生の実験よりも生態学的妥当性が高いと言えるのであろうか。確かに一般的には，日常的な状況での日常的な題材の記憶を取り扱う研究はすなわち生態学的妥当性の高い研究である，と理解されているフシがある。しかし問題はそれほど単純ではないのである。

例えば，Godden & Baddeley (1975) の研究を取り上げてみよう。この研究では記銘時と再生時の環境的文脈の効果を調べるために，スキューバー・ダイビングのクラブの学生を被験者とし，水中または陸上で単語のリストの記銘および再生をさせた。その結果，記銘時と再生時の環境が一致している条件の方が一致していない条件よりも再生成績がよいことが明らかになった。この研究の目的や理論的背景は別として，ここで問題にしたいのは「水中」で記銘および再生をさせることの意味である。言うまでもなく，「水中」で単語のリストを記銘したり再生したりするという状況は「非日常的」であり，この実験の被験者になるという好運（不運？）に恵まれない限り，恐らくは一生経験することのない極めて特殊な状況である。だとすれば，この研究も日常世界から遊離した生態学的妥当性を欠く研究として批判されるべきなのであろうか。恐らく多少とも見識のある研究者ならば，その答えは否であろう。生態学的妥当性を論ずる場合，実験が日常的な状況で日常的な題材を用いてなされるかどうかということは皮相的な問題である。リビングルームでなされたテレビドラマの記憶の実験は必ず生態学的妥当性が高くなるという保証はないし，スペースシャトルの無重力状態でなされた実験は生態学的妥当性を欠くとは限らないのである。

記憶研究が生態学的妥当性を持つということは，要するにその研究で明らかにされた事実や法則が，記憶の本来の機能が生きて働いている「日常世界」での記憶の実相を捉えているということに他ならない。従って，日常世界での記憶の実相を的確に抽出し，その本質を損なわないように適切なシミュレーション（抽象化）がなされてさえいれば，実験室で明らかにされた事実や法則を日常世界にまで一般化することが可能なはずである。逆に，たとえ日常的な状況での日常的な題材を取り扱ったとしても，それが日常世界の記憶の“重要で本質的な”側面を捉えていない限り，決して生態学的妥当性の高い研究とは見做せないことになる。例えば，気温が文章の記憶に及ぼす効果を調べる実験を行い，気温が違えば記憶成績にも差異が生じることが明らかになったとしよう。もしこの研究が環境心理学の理論的枠組みの下で行われたのであれば話は別であるが，もし文章記憶のメカニズムを明らかにするために行われたのであれば，やはり生態学的妥当性を欠く研究と言わざるを得ない。なぜなら，文章の記憶過程においては，知識やスキーマなど被験者側の内的変数および文章の構造など記銘材料の変数が重要で本質的な変数であると考えられるからである。従って，何らかの形でこれらの変数を操作する実験を行わなければ，文章記憶のメカニズムの解明に資するようなデータを得ることは期待できないであろう。そしてこのことは，この研究が実験室でなされるか，それとも日常的な状況で日常的な題材を用いてなされるかということとは，本来，無関係のはずである。但し，この種の実験の場合，厳密な条件統制の可能な実験室でそれを行った方がおそらく有意差が得られやすいであろう。なぜなら，もし気温が文章記憶に影響を及ぼすとしても，その影響は極めて些少であり，厳密な条件統制の下になされた実験によってようやく検出できる程度のものだと考えられるからである。従って，もし気温の影響が実際に存在するとしても，日常世界では殆ど無いに等しい程度のものであり，その意味においても，この種の研究は生態学的妥当性を欠くと言わざるを得ない。逆に言えば，実験室研究では時折こういった重箱の隅をつつくような実験でも運よく有意差が得られ，論文の一編ぐらいなら書けてしまったりすることが問題なのである。冒頭に掲げた Neisser (1978) の批判は，こういった些末で生態学的妥当性に欠ける実験に血道を上げている「実験室オタク派」の研究者達にこそ向けられるべきなのである。但し，日常記憶の研究者達も，「脳天気アバウト派」との謗りを受けないように注意しなければならない。なぜなら，後述するように，生態学的妥当性が研究の「質の高さ」を決定する唯一の基準ではないからである。

3．記憶研究者は何を研究するべきか

それでは，記憶研究の「質の高さ」を決定する基準とはいったい何なのであろうか。恐らく研究者の研究観によって様々な基準が存在するのであろうが，ここでは研究テーマの選択，つまり「何を研究するべきか」という観点から，その基準について考えてみることにする。そもそも記憶の研究者達は，いったいどのよう

な基準に従って自分の研究テーマを選択するのであろうか。恐らく多くの研究者は，前述のNeisser（1978）の言葉を借りれば，自分の選んだテーマが“重要で興味深い特性”を扱っていると考えるからこそ，そのテーマを選ぶのであろう。ここで問題となるのは，何を基準にして“重要で興味深い特性”であるか否かの判定を下せばよいのかという点である。この時，「それは研究者の趣味の問題であって，私はこれが重要で興味深い特性だと思っているのだから，そんなことは私の勝手でしょ！」などと開き直ってはいけない。確かに研究テーマの選択は「学問の自由」に属する事柄なのであるから，その自由は保障されなければならないが，だからといって全てを研究者の主観的判断（すなわち趣味）に委ねてしまうべきではないだろう。なぜなら，心理学は一応「科学」を標榜している学問であり，何らかの客観的基準に基づいて研究の質の高さを査定する営みなしには，学問としての発展や進歩を期待することはできないからである。では，何をその基準にすればよいのであろうか。ここで筆者は次の2つの基準を提案しようと思う。

第1は，前項で述べた「生態学的妥当性」という基準である。心理学の研究は生態学的妥当性を持つべきであるというGibson（1979）やNeisser（1978）の主張には筆者も全く同感である。なぜなら，記憶も1つの心的機能であり，「機能」は本来それが生きて働いている生態学的現実の中でこそ，その真の意味を見出すことができるものだからである。このことは，文章の真の意味は，それが語られた心理的・社会的文脈から切り離されてしまうと，それを読み取ることができない場合があるのと同様である（森・中條，1988）。しかしながら，実験室研究の全てを生態学的妥当性に欠ける無味乾燥な研究であるとして否定し去るのであれば，それはやはり「度量が狭い」と言わざるを得ないであろう。なぜなら，前述したように，日常記憶の研究を行うことが生態学的妥当性の高い記憶研究を行うための唯一の方法ではないし，工夫次第では実験室においても十分にそれは可能だと考えられるからである。

第2に，記憶研究は新しい理論的視点を提起するなり，新しい研究方法によってそれまでは知られていなかった新たな事実を発見するなり，何らかの点で「新しさ」を含んでいるべきである。このことは，次の2つの意味で，「常識を越える」と言い換えてもよい。1つには，記憶研究の専門家の常識を越えるということである。つまり，従来の理論では説明できないような新たな事実を発見するなり，従来の理論の矛盾を暴き，新たな理論を提起することによって，記憶研究のさらなる進展を刺激するインパクトを持つことが大切なのである。記憶研究の研究者が論文を読んで“興味深い”と感じるのは，恐らくそのような論文に出会った時であり，そのような研究こそ，真の意味でオリジナリティのある研究と呼べるのである。ノーベル生理学・医学賞を受賞した利根川進氏が『精神と物質』という著書の中で，“ある種類の蝶々で，ある生理学的メカニズムが明らかにされた後に，そのメカニズムが別の種類の蝶々でも働いていることを例え世界で最初に発見したとしても，それは決してオリジナリティのある研究とは言えない”という主旨のことを述べているが，けだし名言である。単語のリストの記憶実験で見出された法則が文章を記銘材料にした実験にも当てはまることを確かめるだけでは，オリジナリティのある研究とは言えないのである。2つには，一般の人々が持っている記憶についての常識を越えることである。例えば「去る者は日々に疎し」という諺が人間の心理の一面を捉えていることを実験によって確かめたとしても，そんなことは「当たり前ではないか」ということで，決して誰も驚きはしないであろう。「その程度のことなら，わざわざ時間と労力を費やして調べてみるまでもないではないか」と，一笑に付されるのがオチである。つまり，記憶研究は，一般の人々が常識と考えていることが実は間違いであることを明らかにするなり，その常識が実はどのような心理学的メカニズムによって生じているのかを明らかにするなり，何らかの点で一般の人々の常識を越えるべきなのである。日常記憶の研究は実験室研究に比べて，確かに生態学的妥当性の高い研究になる可能性が高いのは事実であるが，その反面，「常識心理学」に陥りやすいという危険性が内包されていることをしっかりと肝に銘じておくべきであろう。

4．日常記憶研究が明らかにしたもの

さて，最近の日常記憶の研究は，Neisser（1978）の檄に応じて，本当に記憶の“重要で興味深い特性”を研究していると言えるのであろうか。ここでは代表的な日常記憶の研究を取り上げて，この点について検討することにしよう。

自伝的記憶の研究　自伝的記憶とは我々が個人史の中で経験する出来事（エピソード）の記憶を指しており，従来は精神分析やカウンセリングなどの分野で診断や治療のために利用されてきた。しかし，最近では認知心理学の分野においても，「手掛り想起法」など様々な手法を用いて数多くの研究がなされ始めた。ここでは一例として「日誌法」を用いた研究を取り上げることにする。

Linton (1982) は，自分自身の出来事の記憶を6年間にわたって組織的に調べた，すなわち，その日の出来事を毎日少なくとも2つ以上カードに記録し，さらに，毎月そのカードのファイルの中からランダムに2つを取り出して，そこに記憶されている出来事を思い出すのである。その結果，忘却には2つのタイプがあることが見出された。第1は，類似した出来事（例えば定期的に出席した会議での出来事など）の個々の特徴が忘れられ，互いに区別できなくなるような忘却である。これに対し第2のタイプは，その出来事について全く思い出せなくなるような忘却であり，あまり重要でない些細な出来事の場合に多くみられた。

Wagenaar (1986) も，これと類似の方法を用いて，彼自身の6年間の日常生活での出来事の記憶を調べた。彼は，それぞれの出来事について，「誰」，「何」，「どこ」，「何時」，という4つの側面と特徴的な細部の重要事項を記録し，さらに，各出来事の「快感—不快度」，「感情度」，「顕著度」を評定した。その結果，(1)「快である」と評定された出来事は，「不快である」または「どちらでもない」と評定された出来事よりも再生率が高いこと，(2)検索手掛りとしての有効性は，「何」，「どこ」，「誰」，「いつ」の順に高いことなどが明らかになった。

これらの研究に共通しているのは，研究者が自分自身を唯一の被験者として行った事例研究だということである。しかし，このことは，決してこの研究の一般性や信頼性を低めるものではない。この研究の被験者は，6年がかりの息の長い研究をやり遂げることのできる強固な意志力の持ち主であることは確かであろうが，だからといって，彼らの記憶様式が一般の人々のそれと特に異なっているとは考えられない。また，この種の事例研究法と，他の多くの記憶研究で採用されている統計的研究法との違いは，要するに被験者内でデータを蓄積するか被験者間でデータを蓄積するかが異なるだけで，そのことによって研究結果の信頼性に違いが生じるとも思えない。そのことは，同じく自分自身を唯一の被験者として実験を行った Ebbinghaus (1885) の忘却曲線が，今なお信頼性を失っていないことを考えてみれば自ら明らかであろう。従って，彼らの研究の評価は，彼らの研究が「自伝的記憶」に固有にみられる記憶の特性を捉えているか否か，という観点からなされるべきである。この点に関しての筆者の評価を敢えて述べるならば，彼らの根気強い研究姿勢に敬意を表して精一杯甘く評価を付けたとしても，やはり「良」しか与えられないであろう。個人史を彩る「出来事」は，自我が世界と出会い，自己と出会う場を提供しているのであり，少々大袈裟に言えば，人格形成や自己概念を獲得するための，全人格を賭けた自我の営みがなされる場でもある。恐らく，そのような「人格形成の営み」としての側面こそが，自伝的記憶の本質なのであり，従って，そのような自我の営みを何らかの形でデータとして捉えることがなされなければ，自伝的記憶に固有の記憶の特性を浮き彫りにすることはできないであろう。彼らの研究で明らかにされた程度のことがわかればよいというのであれば，出来事を記述した文章を記銘材料に用いる実験室研究でも，十分にこと足りるはずである。

目撃者の証言の研究　Loftus と共同研究者達は，目撃者の証言に関する一連の研究を行っている。一例を上げてみよう。Loftus (1975) の実験では，被験者はまず自動車事故の映画を見せられる（段階1）。次に被験者は2群（A群とB群）に分けられ，その映画についての10個の質問をされるのであるが，その中の1個の質問はA群の被験者とB群の被験者とでは内容が異なっていた。すなわち，A群の被験者には，例えば「『止まれ』の標識を過ぎた時，白いスポーツカーはどれくらいのスピードで走っていたか」のように，全て映画の内容に関する正確な情報を組み入れた質問がなされた。これに対してB群の被験者には，例えば「田舎道を走って小屋を過ぎた時，白いスポーツカーはどれくらいのスピードで走っていたか」というように，誤った印象を与えるような質問がなされたのである（映画には，車が「止まれ」の標識を過ぎて行く場面はあるが，小屋は出てこない。従って，この質問は小屋があったことを暗示し，誤った印象を与えるのである）。1週間後，全ての被験者に映画の内容について10個の新しい質問がなされた。その中の1つは「あなたは小屋を見たか」という質問であった。その結果，この質問に対して，A群ではわずかに2.7%の被験者しか「はい」と答えなかったのに対し，B群では17.3%の被験者が「はい」と答えたのである。つまり，この実験は，人々が目撃した出来事の記憶は，後からその出来事に関する紛らわしい情報を与えられると，歪められてしまう場合があることを示しているのである。

さて，この種の研究の記憶研究としての意義について考えてみることにしよう。Loftus らは，一連の研究によって，ある出来事の記憶が後続の情報によって修正されること，また，新しい情報が記憶に組み入れられ，記憶を更新し，元の情報でこれと合わないものがあるとそれを消し去ること，などを示したのであるが，このような事実は，Bartlett (1932) の古典的研究以来，繰り返し見出されている事実であり，理論的にも決して新しい内容を含んでいるわけではない。従って，この研究に何らかのの意義を見出すとすれば，

それは理論的な意義というよりも，むしろ応用的・実践的な意義であろう。つまり，研究内容が警察の尋問や裁判など，現実社会のシリアスな問題と深く関わっているということである。日常記憶研究の推進者達が，研究成果の実践性や応用可能性をそのスローガンとして掲げるのであれば，やはりこの点は重要であろう。それにしても，とかくシリアスな社会問題からは身を退き，毒にも薬にもならない研究に閉じこもりがちな日本の認知心理学者とは対照的に，毒にも薬にもなる可能性のある研究にも果敢に取り組む欧米の認知心理学者達の志と気位の高さは，いったい何に由来しているのであろうか。

フラッシュバルブ記憶　人は，例えばジョン・ケネディの暗殺のような，歴史的大事件のニュースに初めて接した時の状況を，長い年月の後にも鮮明かつ詳細に想起することができる。Brown & Kulik (1982) は，ケネディ暗殺の14年後に，事件当時20歳から60歳であった80人の被験者が，事件のニュースを初めて知った時の状況を覚えているかどうかを調べた。その結果，なんと80人中79人の被験者が，その時の状況を思い出すことができたのである。

このフラッシュバルブ記憶の成立機序に関しては，以下のような2つの対立する見解が表明されている。第1の見解は，「特殊メカニズム説」と呼べるもので，一定以上の強い情動を喚起する重大な出来事に接すると特殊な神経のメカニズムが作動し，このメカニズムの働きによって，その出来事に接した時の情景が写真のように鮮明に焼き付けられる，というものである。これに対し，Neisser (1982) は「リハーサル説」を唱えている。すなわち彼の説では，フラッシュバルブ記憶が保持されるのは神経メカニズムの特殊な処理過程によるのではなく，出来事が起こった後でもそのことを何度も繰り返しリハーサルし，話題にするからである，とされている。

現在のところ，これら2つの説の妥当性について結論を下せる段階ではないが，筆者のこの論争に対する見解は以下の通りである。すなわち，もし将来フラッシュバルブ記憶の成立に関わる特殊な神経メカニズムの存在が確認されたとしても，恐らくそれだけでフラッシュバルブ記憶が成立するのではなく，Neisser (1982) のいうリハーサルも，その成立に重要な役割を果たすのではないだろうか。だとすれば，人は何のために重大な出来事を繰り返し話題にし，リハーサルする必要があるのかを問わなければならないし，このような問こそが，フラッシュバルブ記憶の人間にとっての意味を明らかにすることにつながるであろう。なぜなら，あらゆる心のメカニズムは，本来，何らかの目的のために作動するものだからである。しかしながら，従来のフラッシュバルブ記憶の研究では，記憶のメカニズムを問うことに終始し，そのような問が立てられることは殆どなかったように思われる。日常記憶研究が，伝統的な実験室研究では明らかにできなかった記憶の新たな側面を捉えるためには，新たな問の立て方が必要なのではないだろうか。

アクションスリップの研究　我々は日常生活において，きゅうすに入れるはずのお茶の葉をうっかり湯呑みに入れてしまう，というような失敗をすることがある。このような失敗はアクションスリップと呼ばれ，日常記憶研究によって初めて掘り当てられた重要な研究テーマの1つである。

Reason (1979) は35人の有志の被験者を対象にして，彼らが日常生活で起こしたアクションスリップの事例を日誌法によって収集した。2週間の間に全部で400ほどの事例が収集されたが，Reason (1979) はそれらを，①記憶貯蔵の失敗，②判断の失敗，③下位行動の失敗，④弁別の失敗，⑤プログラム構成の失敗，という5つのカテゴリーに分類している。Reason (1984) や Norman (1981) は，行動スキーマという概念を導入することによって，これら多様なアクションスリップの成立機序を説明するためのモデルを提案しているが，これらのモデルの検討と評価は他の機会に譲ることにして，ここではアクションスリップ研究の意義について検討しておくことにしよう。

なによりもまず注目しなければならないのは，アクションスリップという現象は，認知と行動の乖離，言い換えれば精心と身体の乖離がもたらした現象だということである。従来の認知心理学では，もっぱら人間の認知過程を解明することにのみ注意が向けられ，その認知過程が（特に日常場面では），実は行動のシステムと密接に相互作用する関係にあることが見落とされがちであった。その意味では，アクションスリップという現象は，認知心理学といえども決して「心身論」を避けて通ることができないことを示唆するとともに，それにアプローチする糸口を与えているとも言えるだろう。筆者の直感では，この現象の解明は，我々を，人間の認知過程が実は身体に支えられて成立していることの再認識へと，さらには認知と行動の「関わり」の中にこそ人間の認知過程の様々な謎を解くための鍵が隠されているのだということの発見へと導いてくれると思うのだが，いかがであろうか。しかし，その謎を読み解くためには，我々にはなぜアクションスリップを引き起こすような認知と行動の構造が備わっているのかを問うことから始めなければならないであろう。

5．日常記憶研究の目指すべきもの

以上では，代表的な日常記憶の研究を取り上げて，それらが従来の実験室研究では得られなかった新しい知見を加えることができたか否かという点について検討してきた。この点について現時点で評価を下すとするならば，“熱意は十分に伝わってくるが，まだ十分な成果が上がっているとは言いがたい”という Baddeley（1990）の評価がおそらく最も妥当な評価と言えるのではないだろうか。しかし，日常記憶研究はたかだか十年余りの歴史しかもっておらず，Banaji & Crowder（1989）のように，現段階で“日常記憶研究は破産している”と断じ去るのは時期尚早というものである。日常記憶研究は，実験的厳密さを重んじる伝統の中で閉塞状態に陥っていたという観のないでもなかったそれまでの記憶研究に新風を吹き込み，研究を再び（認知心理学の台頭期以後）活性化させるという重要な役割を果たしたことは紛れもない事実である。少なくともその点に関しては十分に評価されてしかるべきであろう。しかしながら，日常記憶の研究が一時のブームで終わることなく，記憶研究の重要な研究分野の１つとして認知され，今後さらなる発展を迎えるためには，目指すべき目標をしっかりと見定めておくことが肝要である。それではいったい，日常記憶の研究者は何を目指すべきなのであろうか。まず考えておかなければならないことは，自らの役割を正しく認識した上で，伝統的な実験室アプローチを採る研究者との連携を図ることである。そのためには，「日常記憶派」も「実験室派」も互いのアプローチの効用と限界を十分に認識すると共に，互いの理論とデータを照合・点検し補完し合う，寛容と連帯の精神が不可欠である。その意味において，両派の間で最近なされている論争が，連帯と協調に至るワン・ステップになることを願わずにはいられない。

さて，日常記憶の研究者が目指すべきは，第１に，実験室研究では見落とされがちな記憶の特性に着目し，それを研究の俎上にのせることである。つまり，実験的統制が困難であるが故に実験室研究ではとかく切り捨てられがちではあるが，しかし記憶の実相を捉えるためには欠かすことのできない重要な変数を取り上げるべきなのである。既に実験室研究で明らかにされている事実や法則が日常記憶にも当てはまるかどうかを確認するだけでは，研究としての価値を認めることはできない。また，前述したように，一般の人々が既に常識として知っている事実を実際に確かめてみるというだけなら，わざわざ研究するには及ばない。研究の質がそのような低い水準に留まっている限り，「日常記憶研究は破産している」という批判を免れることはできないであろう。いまだ実験室研究では明らかにされておらず，しかも一般の人々の常識を越えた，何らかの新しい知見を提供し得た時にこそ，日常記憶の研究者は上記の批判を免れ，「フロンティア芸術派」との賛辞を与えられるに値するのである。そして，もしそのような高い水準の研究がなされたならば，必ずその研究は「実験室派」の研究者達をも刺激し，彼らをより質の高い実験室研究へと向わせ，「実験室オタク派」から「名人芸テクノロジー派」へと脱皮させるインパクトを持つことになるであろう。

日常記憶研究が第２に目指すべきは，記憶のメカニズムよりも記憶のダイナミズムを明らかにすることである。つまり，一般に記憶の実験室研究では，多様な記憶過程の中の特定の過程（例えば符合化や検索の過程）に焦点を絞り，そこでどのようなメカニズムが働いているかを明らかにするというアプローチが採られる。その際，焦点を絞っている過程のメカニズムに関わる重要な変数を実験的に操作し，その他の過程や変数が実験データに介入しないように厳密な条件統制を行うのが普通である。このため，そのメカニズムを明らかにしようとしている，ある特定の過程が，その他の記憶過程や他の認知過程とどのように相互作用し合っているかを見落としてしまうことになりやすい。これに対し日常記憶の研究では，こういった条件統制をそれほど行わないので，記憶の諸過程が相互作用し合う記憶のダイナミズムを捉えることも可能である。人間の記憶には短期記憶，長期記憶，エピソード記憶，意味記憶，潜在記憶，顕在記憶，作業記憶，メタ記憶等々，様々な過程があると考えられているが，それらは決して個々に独立して機能する「モジュール」ではなく，相互に密接に関連し合いながら機能している。また，人間の記憶は（特に日常場面においては），計算，問題解決，推理，意思決定など，他の様々な認知機能とも密接不可分の関係にある。さらに言えば，人間の記憶システムは決して「閉鎖系」ではなく，認知・行動・感情のシステムとも通低し，日常場面ではそれらと一体となって機能する「開放系」としての特性を持っているのである（森，1992）。従って，日常記憶の研究に課せられた重要な研究課題は，実験室研究ではとかく見落とされがちな，こういった記憶のダイナミズムを捉えることにある，と言えるのではないだろうか。

ところで，筆者は以前に人間の記憶の諸過程を色のイメージに例えて，ホワイト・メモリー（顕在記憶），ブラック・メモリー（潜在記憶），レッド・メモリー（記憶の感情と関わる側面），グリーン・メモリー（記憶の創造的思考と関わる側面），ブルー・メモリー（メタ記憶）等に区分し，記憶研究を生態学的妥当性の高

い，リアリティのあるものにするためには，「シロクロ」ではなく「カラー」の要素を加えるべきだと提案したことがある。このメタファーを敷衍して，日常記憶の研究を写真芸術に例えるならば，それはちょうど『撮りっきりコニカ』で撮るカラー写真のようなものであろう。誰でも簡単にカラー写真を撮ることはできるが，レンズ交換やシャッター速度を任意に調節できないので，平凡な写真になりやすいという意味である。つまり，カメラ・アングルやシャッター・チャンスに切れ味がなければ，素人の撮るスナップ写真と大差のない，ありふれた陳腐な写真にしかならないのである。これに対して，実験室研究はスタジオで撮る写真（但しシロクロ）のようなものである。こちらはレンズ交換もできれば，照明設備もあるので，素人では撮れないような凝った作品をものにすることも可能である。しかし，設備・装置にモノを言わせて，「この写真の被写体は本当に人間なのだろうか？」と訝しがられるような，そんな無機的な造形美だけを追求するオタッキーな世界にのめり込むべきではない。なぜなら心理学は，現実世界に生きている血も涙もある人間の心の真実を捉える（写し撮る）学問だと思うからである。

引 用 文 献

Baddeley, A. D. 1990 *Human memory: Theory and practice.* London: Lawrence Erlbaum Associates Ltd.

Banaji, M. R., & Crowder, R. G. 1989 The bankruptcy of everyday memory. *American Psychologist,* **44**, 1185–1193.

Bartlett, F. C. 1932 *Remembering.* Cambridge: Cambridge University Press.

Brown, R., & Kulik, J. 1982 Flashbulb memory. In U. Neisser(Ed.), *Momory observed: Remembering in natural contexts.* San Francisco: Freeman.

Cohen, G. 1989 *Memory in the real world.* London: Lawrence Erlbaum Associats Ltd.

Ebbinghaus, H. E. 1885 *Memory: A contribution to experimental psychology.* Republished in 1964. New York: Dover.

Gibson, J. J. 1979 *The ecological approach to visual perception.* Boston, Mass.: Houghton Mifflin.

Godden, D., & Baddeley, A. D. 1975 Context-dependent memory in two natural environments: On land and under water. *British Journal of Psychology,* **66**, 325–331.

Linton, M. 1982 Transformations of memory in everyday life. In U. Neisser(Ed.), *Memory observed: Remembering in natural contexts.* San Francisco: Freeman.

Loftus, E. F. 1975 Leading questions and the eyewitness report. *Cognitive Psychology,* **7**, 560–572.

森　敏昭・中條和光　1988　文章理解　日本児童研究所（編），児童心理学の進歩　第24巻，Pp. 49－73

森　敏昭　1992　概観――記憶研究のニュー・フロンティア　認知科学ハンドブック　共立出版　Pp. 195－202.

Neisser, U. 1978 Memory: What are the important questions? In M. M. Gruneberg, P. E. Morris, & R. N. Sykes(Eds.), *Practical aspects of memory.* London: Academic Press.

Neisser, U. 1982 *Memory observed: Remembering in natural contexts.* San Francisco: Freeman.

Norman, D. A. 1981 Categorisation of action slips. *Psychological Review,* **88**, 1–15.

Reason, J. T. 1979 Actions not as planned: The price of automatisation. In G. Underwood & R. Stevens(Eds.), *Aspects of consciousness,* Vol. 1. London: Academic Press.

Reason, J. T. 1984 Absentmindedness and cognitive control. In J. E. Harris & P. E. Morris(Eds.), *Everyday memory, actions and absentmindedness.* London: Academic Press.

Wagenaar, W. 1986 My memory: A study of autobiographical memory over six years. *Cognitive Psychology,* **18**, 225–252.